

# 「私たちの心のあるところ」

(ルカ12:22~34)

挽地茂男

2019.6.23 日本基督教団千歳丘教会

大学で教えておりますと、いろいろな学生と親しくなる機会があります。千葉大学で宗教学を教えていた頃にも、授業の後で何度か質問に来る学生と親しくなって、こちらの仕事の手伝いをしてもらったものですから、お昼ご飯でも一緒に食べようということになって、じゃどこで食べようかとなって、その学生にどこか良く行く食堂にでも連れて行くように案内を頼みますと、彼が言うには、千葉には（当日は千葉の大学で授業があったものですから）美味しいところがないんです、って言うんですね。特に美味しくなくてもいいから、手軽に食事できるところがいいよ、と申しますと、実は千葉では食事しないことにしている、って言うんですね。授業があって



昼時、千葉に  
いなければな  
らないときは  
どうするの、  
と聞きますと、

大学ではメロンパンしか食べない、と答えが返ってきました。で、結構貧乏しているのかな、とは思ったのですが、それにしては文献として紹介したかなり高い書籍を購入したとか、全集を買ったとかという話が出てきていたものですから、変だなあとは思ったのです。でも、まずは食事ということで、



東京駅近辺  
なら案内で  
きますとい  
うことで、  
わたしも彼

も昼からの授業はもうないからということで、千葉から新橋まで戻ってきて食事することになりました。電車の中（や案内された食事処）での話で、驚いたのですが、実は、彼は若いくせに大変な美食家で、東京の有名な店は殆ど制覇していて、自分でもある有名な料理人に弟子入りしていて、料理をするらしく、購入する食材とか出かけて行って食べる食事代が一月20万円平均だというんですね。学生が一月20万の食費というのはにわかに信じがたい話ですが、そんな学生もいるのですね。連れて行かれたところは――若干の心

配どおりに——少々高級な鳥料理の店でした。しかし、昼のメニューだけは手頃な値段で食べさせる店だということで、まあ心配せずに食事を済ませることが出来ました。食事の後、その学生は築地にたのんであった包丁を取りに行くと、新橋で別れたのでした。

今日読みました聖書の箇所も食べることが出て参ります。着ることも出て参ります。「だから言うておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな」(22節)と言われて



りませんし、健康に留意した食生活のために、何を食べるか食べないかと配慮や調整することを否定しているのでもありません。また「今日は何を着ていこうか」と身だしなみやおしゃれに気を遣うことを否定しているのでは

ありません。

イエス・キリストが「鳥——ルカでは鳥が出てくるのですね、その鳥——のことを考えてみなさい」とか「野原の花がどのように育つか考えてみなさい」と鳥や花に目を向けるように命じておられるのはなぜでしょうか。

まず鳥のことや野原の花のことに目を向けさせている理由は、第一に、わたしたちの「目を鳥や花の方に引き離す」ということです。何かからかというますと、目の前の直接的な必要から、目を引き離すということです。ここで「何を食べようか」「何を着ようか」と言われているものは、思い悩みの対象となるものとして引き合いに出されています。それらは人間の生存のための必要物であり、いつの時代も人間の根本的な不安と関係してきたものです。イエス・キリストは人間生存のための最も直接的な必要物——食物と衣服(衣食)——に関する根本的な不安を話題にしています。直接的な必要から生じる不安は、むしろ現代の日本社会においては、食物や衣服といった形を取らない場合の方が多いでしょう。人間関係を含むより複

雑なものになっている可能性があります。しかし主イエスは、それに対しても原理的には同じ対応を見せられるでしょう。イエス・キリストは、「空の鳥」や「野の花」に目を向けるようにいいながら、



ヒナキキョウソウ

自分にとっての直接的な必要から、またそこから生じる不安から目を引き離させるのです。この箇所の訓戒は、不安な感情を持たないようにするといった、われわれの感じ方ではなく、われわれのもっと根本的な生き方を問題にしています。「不安はかゆみのようなものである。考えまといと決心するだけでは、その心配は無くならない」と言った人がいます。その通りです。ではこの不安にどのように対処したら良いのでしょうか。

主イエスが「これらのことで思い悩むな」と語って、不安に支配されてはならない、と述べておられるのには、三つの理由があります。その一つは、①思い悩みの対象となっているものよりより大切

なものがあるということです。23節。「12:23 命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。」直接的な必要はより大切なものを見えなくさせるのです。大切なものが見えなくなると、食物と衣服（多くの所有）があってもますます不安の中に人生を送る人々もいるのです。わたしたちは、わたしたちの持っているもの、あるいは持たないものへの不安から、あれもないこれもないという不安から解放されなければなりません。イエス・キリストの教えはわれわれが何を持つかということよりも、まず、われわれが誰であるかということに集中させるのです。戦後初の東大総長の南原繁は「何かをなす (to do) の前に何かである (to be) ということを先ず考えよということが（新渡戸稲造）先生の一番大事な教えであったと思います」と語っています。主イエスがわたしたちの目を「空の鳥」や「野の花」に向けさせたのは、鳥や花を通して、その鳥や花に眼差しを向けておられる神に、わたしたちの目を向けさせるためでした。その眼差しをたどって神に目を向けさせるためです。

そしてわたしたちは、鳥と花とわたしとに眼差しを注いで折られる神の前に、わたしが何者であるかを確認する必要があるのです。to do（「何かをする」か）あるいは to have（「何かを持つ」か）ではなく、to be（「何である」か）を大切に考えることが必要なのです。

ですからわたしたちが不安に支配されてはならない二つ目の理由は、②神は彼ら（鳥や花）の面倒を見ておられるという事実を知ることです。そしてまた同じようにわたしたちも神さまの配慮の対象であることを思い起こすようにと語っておられるのです。24節。「12:24鳥のことを考えてみなさい。



種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。

だが、神は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。」27－28節。「12:27 野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着

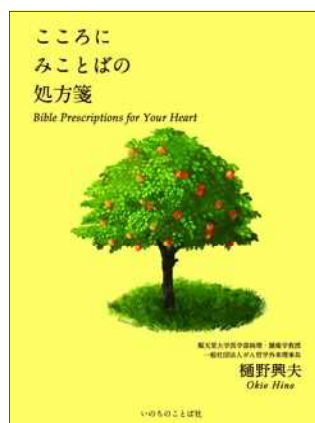
飾ってはいなかった。12:28 今日 は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。」神の摂理に対する新たな信頼が必要なのです。主イエスの論法は「小から大」に向かう論法です。つまり、小さな生物（鳥）を話題に乗せ、その上で鳥よりも大きい価値ある人間へと話を展開するのです。ご自身のものを配慮される神の力への信頼こそが、思い悩みからわたしたちを解放してくれるのです。

さらにわたしたちが不安に支配されてはならない三つ目の理由は、③思い悩むことが、解決につながらないからです。25－26節。「12:25 あなたがたのうちのだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。12:26 こんなごく小さな事さえできないのに、なぜ、ほかの事まで思い悩むのか。」わたしたちがいくら心配しても、身長を三センチ高くすることも、寿命を一日延ばすことも出来ません。もしわたしたちが思い悩むことによって、これほど小さなことさえ



実現できないのなら、他のことについても、思い悩んでも同じことだと言うのです。

先日来お伝えしている、夏の講演会の講師の樋野興夫先生が、ご自身の本の中で、今日の聖書の箇所にとりあげて、語っておられる



ところがあります。がんの方に思い悩むなとか、思い煩うなと言うことはとても大変な、あるいは勇気さえいる

ことだと思いますが〔がんを病む方に向かって〕こう言っておられます。「人生には、理由が分からないことが山ほどあります。〔がんの発症を含めて〕物事が起こるとき、意味が分からないことばかりです。自分ではどうにもコントロールできないことに一喜一憂するのは、つかれてしまいます。自分でコントロールできることについては、努力するのがよいと思います。ですが、自分ではコントロールできないことに対して、心配するのはやめることです。

やるべきことをやって、あとは自己放棄をすることです。全力を

尽くして、あとは成るようにしか成らないのです。

医師の余命宣告は、あくまでも7割の確率です。

“確率”であって“確実”ではないのです。がん患者さん全体の割合であり、あなた個人のことはないので、心配しすぎないことです。

がんの再発を心配しても、それもわかりません。医師もわからないのです。自分の寿命がいつまでか、わかっている人はいません。

わからないことはグレーゾーンのままでいいのです。

わからないときに、私が『わかりませ



ん』と答えると、患者さんは『先生もわかりませんか』と、うれしそうにおっしゃいます。きっと大切なのは、何を言われたかではなく、だれに言われたか、なのでしょう。

がんになったために、仕事のプロジェクトから外れることになって悔しい思いをしたり、だれかの助けを借りる必要が生まれて、自

分に自信をなくしたりすることもあるでしょう。社会から必要とされていない存在だと感じてしまう、と吐露する人もいます。

あなたがこの地上に生まれたのは、何のためでしょうか。人生の目的は何でしょう。

あなたが人生に期待できなくなり、自分自身に希望が持てなくなっても、あなたは『人生の方から期待されている存在』です。苦しみの中で、それを実感する深い学びの時が与えられているのです。

心配し続ける私たちに、空の鳥を見なさいと、聖書は語ります。

そして、こう続けます。『百合の花〔新改訳聖書〕のことを考えてみなさい。どうして育つのか。紡ぎもせず、織りもしないのです。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の1つほどに



も着飾ってはいませんでした。しかし、きょうは野にあって、あすは炉に投げ込まれる草をさえ、神はこのように装って

くださるのです。ましてあなたがたには、どんなによくしてくださることでしょう』

衣食住が足りていれば、それでいいではないでしょうか。

あとは、自分の性格〔品性〕を完成させることです。人間は最後の五年が勝負です。自分で解決できないことは考えないことです。自分の死については、無頓着でいいのです。『だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります』」（『ここにみことばの処方箋』42-45）。

わたしたちが思い悩みにとらえられているとき、わたしたちの視野は小さくなり、トンネル化現象と呼ばれるような視野の狭窄がおこります。視野が非常に狭められて、それ以外には何も見えなくなってしまうのです。このイエス・キリストの「空の鳥」を見よ「野の花」を見よ、という言葉は、わたしたちを思い悩みから解放する第一歩を示しています。現実の思い悩みの対象から目が離れたとき、はじめて他のものが、見えてくる。またもっと大切なものが、つまり食べ物や着物よりも大事な

ものと言われている「命」とか「体」とかが視野に入ってくるのです。そして「命」や「体」の大切さが理解されたとき、食べ物、大切さや着物の大切さが、また、正しく理解されてくるのです。

イエス・キリストが鳥（鳥）や野原の花に目を向けさせているのは、直接的な必要から目を離させるということが一つですが、さらに、わたしたちが目を上げて神が創られた世界を見るということを促しているのです。そこに見なければならぬものがあるということです。自然や世界に目をやることによって見えてくるもの、それは、自然界にまたこの世界に神が働いておられる、ということ、神の創られた世界の持つ、創造の秩序です。ローマの信徒への手紙 1 章 19 – 20 節は次のように語っています。「1:19 …神について知りうる事柄は、…明らかなからです。神がそれを示されたのです。1:20世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。」また詩編の作者は「詩19:2 天は神の栄光を物語り

／大空は御手の業を示す。19:3 昼は昼に語り伝え／夜は夜に知識を送る。19:4 話すことも、語ることもなく／声は聞こえなくても19:



アンドロメダ大星雲(秋の清里)

5 その響きは全地に／その言葉は世界の果てに向かう。」（詩 19 : 2 – 5）と語ります。

神の創られた世界に目を向けること。イエス・キリストは神の**創造の秩序**を発想の原点としてものを見るのです。**米一粒に神の創造を見る、と言った人がいます。少し大げさな感じがするかも知れませんが、実にその通りだとも思います。わたしたちの目が、また心が神の眼差しと神の心とあふれ合うとき、次の勧めが、真実を持って響いてきます。31 – 32 節。12:31 ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。12:32 小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。**真に思い悩むべきこと、求むべきこととは、神の国を求めることなのです。優先順位が変更されるの

です。小さな群にとって、目の前の必要は決して小さなことはありません。しかし「空の鳥」や「野の花」をとおして、神の創られた世界の創造の秩序に導かれるとき、信仰のもう一つの豊かさに導かれるのです。神が与えて下さる「神の国」を、わたしたちは経験的に知ることになるのです。

その時こそ、人は、「他の人々の必要に応えるために献身」という、**所有について思い悩むことの正反対の態度をもつ存在、つまり「与える人」へと成長していくのです。** 33節。「12:33 自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。」主イエスが語られた、**これらの思い悩みと富についての一群の言葉は、地上的な富を蓄えることによって将来に安全を計ろうとする、視野の狭さに対して警告し、同時に、神の国に心から献身するという知恵を勧めるのです。真の安全は富にではなく、神の摂理に見いだされるからです。**

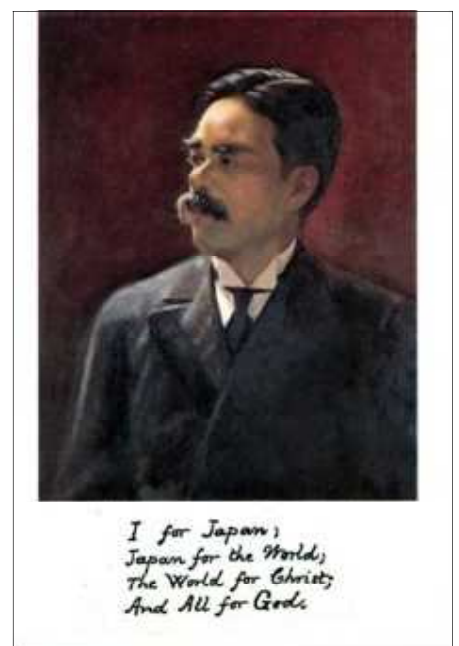
34節。「12:34 あなたがたの

**富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。」**内村鑑三は人生の目的は、「品性の完成にある」と言い、人が後世に残せる最大の「遺物」は「勇ましく高尚な生涯」だと言いました。わたしたちの真の富とは、主イエスを通して降り注いでくる神の恵みと愛です。その恵みと愛に応えるべく、あたらしい一週間も歩んでまいりましょう。祈りましょう。

2005. 1. 30 上倉田伝道所礼拝

2005. 5. 25 東京女子大学 礼拝 313

2019.6.23 日本基督教団千歳丘教会





12:22 それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言うておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。

12:23 命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。

12:24 鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。

12:25 あなたがたのうちのだれが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができるか。

12:26 こんなごく小さな事さえできないのに、なぜ、ほかの事まで思ひ悩むのか。

12:27 野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。

12:28 今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのこ

とである。信仰の薄い者たちよ。

12:29 あなたがたも、何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない。また、思ひ悩むな。

12:30 それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。

12:31 ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。

12:32 小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。

12:33 自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。

12:34 あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。」

12·22 Εἶπεν δὲ πρὸς τοὺς μαθητάς (αὐτοῦ), Διὰ τοῦτο λέγω ὑμῖν· μὴ μεριμνᾶτε τῇ ψυχῇ τί φάγητε, μηδὲ τῷ σώματι τί ἐνδύσηθε.

12·23 ἡ γὰρ ψυχὴ πλείον ἐστὶν τῆς τροφῆς καὶ τὸ σῶμα τοῦ ἐνδύματος.

12·24 κατανοήσατε τοὺς κόρακας ὅτι οὐ σπεύρουσιν οὐδὲ θερίζουσιν, οἷς οὐκ ἔστιν ταμεῖον οὐδὲ ἀποθήκη, καὶ ὁ θεὸς τρέφει αὐτούς· πόσω μᾶλλον ὑμεῖς διαφέρετε τῶν πετεινῶν.

12·25 τίς δὲ ἐξ ὑμῶν μεριμνῶν δύναται ἐπὶ τὴν ἡλικίαν αὐτοῦ προσθεῖναι πῆχυν;

12·26 εἰ οὖν οὐδὲ ἐλάχιστον δύνασθε, τί περὶ τῶν λοιπῶν μεριμνᾶτε;

12·27 κατανοήσατε τὰ κρίνα πῶς αὐξάνει· οὐ κοπιᾷ οὐδὲ νήθει· λέγω δὲ ὑμῖν, οὐδὲ Σολομῶν ἐν πάσῃ τῇ δόξῃ αὐτοῦ περιεβάλετο ὥς ἐν τούτων.

12·28 εἰ δὲ ἐν ἀγρῷ τὸν χόρτον ὄντα σήμερον καὶ αὔριον εἰς κλίβανον βαλλόμενον ὁ θεὸς οὕτως ἀμφιέζει, πόσω μᾶλλον ὑμᾶς, ὀλιγόπιστοι.

12·29 καὶ ὑμεῖς μὴ ζητεῖτε τί φάγητε καὶ τί πίητε καὶ μὴ μετεωρίζεσθε·

12·30 ταῦτα γὰρ πάντα τὰ ἔθνη τοῦ κόσμου ἐπιζητοῦσιν, ὑμῶν δὲ ὁ πατὴρ

οἶδεν ὅτι χρήζετε τούτων.

12·31 πλὴν ζητεῖτε τὴν βασιλείαν αὐτοῦ, καὶ ταῦτα προστεθήσεται ὑμῖν.

12·32 Μὴ φοβοῦ, τὸ μικρὸν ποίμνιον, ὅτι εὐδόκησεν ὁ πατὴρ ὑμῶν δοῦναι ὑμῖν τὴν βασιλείαν.

12·33 Πωλήσατε τὰ ὑπάρχοντα ὑμῶν καὶ δότε ἐλεημοσύνην· ποιήσατε ἑαυτοῖς βαλλάντια μὴ παλαιούμενα, θησαυρὸν ἀνέκλειπτον ἐν τοῖς οὐρανοῖς, ὅπου κλέπτῃς οὐκ ἐγγίζει οὐδὲ σὴς διαφθείρει·

12·34 ὅπου γὰρ ἐστὶν ὁ θησαυρὸς ὑμῶν, ἐκεῖ καὶ ἡ καρδία ὑμῶν ἔσται.